

春岡村の伝説

＜真義真言宗 覚蔵院＞

アーバンみらい東三番街ができたころはまだ春野という町名はなく、大字深作でした。この深作には宝積寺のほかにもう一つ、覚蔵院というお寺があるのをご存知ですか。東大宮駅に向かう新しいバスルートの春岡3丁目を少し過ぎたあたり、進行方向。右手に見える小さなお寺です。現在住職はおらず、同じ宗派の多聞院が管理していますが、かつては深作村に大きな影響力を持つお寺でした。

覚蔵院は今から360年位前の江戸時代前期、日雅上人によって開かれ、深作の氷川神社にも庵をつくって僧を置いて管理していました。村内にあった観音寺、光明寺（いずれも明治初期に廃寺）にも門徒に配し、江戸時代は相当栄えていました。覚蔵院の墓地に安永九年（1780）の筆子塔があることから、寺子屋も開かれていたようです。また村の高札場も覚蔵院の前にありました。深作氷川神社でおこなわれていたささら獅子舞は、覚蔵院の中興の祖盛範（天明七年1787没）が春岡小学校の所にあった諏訪神社（現在は深作氷川神社に合祀）で、村の若者たちに田楽や神楽、念仏踊りなどを合わせた創作舞を舞わせたのがその始まりです。

寺の門の前には延宝八年（1680）銘の石造馬頭観音像が祀られています。かつては3月15日の観音様の春祭りでは周辺で一番賑やかな「馬寄せ」が行われていました。明治時代の記録によれば、深作村には農耕馬が46頭もいました。（ちなみに隣の丸ヶ崎村はわずか9頭でした。）祭りの日、毛並みを整えられ、五色の布に鈴をつけた飾り馬がシャンシャンと鈴の音を響かせて集まります。その年お嫁に来た新妻も島田を結って参拝しました。これを見に深作村だけでなく近在の村人たちが大勢やってきました。馬や牛にはゆでた大豆を藁苞に入れてねぎらい、参拝者には甘酒、麦茶、かきもちなどがふるまわれました。露店も出て、大人も子供もお小遣いを握りしめ楽しみにしていたそうです。深作のシクラメン生産者の松本さん（現在はブルーベリーに転向）は子どもの頃、自分の家で飼っている牛をひいてお参りしたそうです。この馬寄せも昭和36年ごろから耕運機が普及し始め、馬や牛は売られていなくなってしまったので、昭和40年ごろには行われなくなりました。

（写真は覚蔵院と馬頭観音像）



※12月3日(金)～12日(日)春野図書館で大宮各地の伝説を描いた紙芝居原画展が開かれます。春岡の「寅子伝説」も出ます。どうぞお楽しみに。（平山由喜）